

— 君津市 —

# 久留里城跡3

倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

ISWIN JAPAN株式会社  
君津市教育委員会

— 君津市 —

く る り じょうあと  
久留里城跡3

倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

ISWIN JAPAN株式会社  
君津市教育委員会



# 序 文

市城北東部の久留里は、清澄山系を源とし、君津・木更津・袖ヶ浦の3市を貫流する小櫃川の中流域、南総の中央に位置します。また、名水の里としても知られ、街中や周辺には、上総掘りによる掘り抜き井戸が随所に見られます。

県内には、中世戦国から近世を経て、明治維新、廃藩置県まで続いた城が5つあり、久留里城はその中の一つです。近世の黒田氏時代の久留里城は、丘陵部に本丸と二の丸、麓に三の丸を配置するものでした。昭和52年には、久留里城址発掘調査団によって、天守閣の再建と資料館建設に伴う発掘が本丸跡と二の丸跡で行われ、櫓の礎石、石切場跡等、城普請を知るうえで貴重な成果を上げています。

本報告書は、民間開発事業に伴い発掘調査を実施した久留里城跡3の調査成果をまとめたものです。今回はトレンチによる確認調査でしたが、建物の基礎である地業遺構、三の丸内を区画する石組溝等を検出し、関係資料には描かれない、三の丸施設の手がかりを得ることができました。

本書が学術資料、教育資料として活用されるとともに、市民をはじめ多くの皆様の目にとまり、遺跡というものがごく身近にも存在しているのだということを認識していただく契機となり、埋蔵文化財の保護を推進することができましたならば幸いです。

結びに、ご指導・ご助言いただきました千葉県教育庁教育振興部文化財課、発掘調査・整理作業に従事した調査補助員の方々、ご協力をいただいた地域の方々、関係者の皆様に対しまして、心から感謝の意を表します。

令和6年3月

君津市教育委員会  
教育長 粕谷 哲也

# 例 言

1 本書は、令和5年度調査実施の千葉県君津市久留里字交代416番4の一部ほかにも所在する久留里城跡3の成果を収録した、発掘調査報告書である。

2 調査は、千葉県教育委員会の指導のもと、君津市教育委員会が実施した。

3 事業名および発掘調査の期間・面積、整理期間は以下のとおりである。

倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

(確認調査) 令和5年11月13日～同年12月19日 505.9㎡/4,548.24㎡

(整理作業) 令和6年1月10日～同年2月29日

4 発掘調査・整理作業・原稿執筆は矢野淳一が、編集は曾我真実子が担当した。

5 発掘調査で使用した遺跡コードは、久留里城跡：KT039である。平成3・6年度に君津市教育委員会(担当：財団法人君津都市文化財センター)によって、調査が行われているため、今回の調査対象地を「久留里城跡3」とした。また、遺物の注記は、遺跡コード+トレンチ番号+遺構略号・番号+遺物番号(一括)の順とした(例：KT039-3 T3 SB001 0001)。また、遺構の性格を把握するため、当初のトレンチを拡張した箇所があり、この場合の遺物注記は、トレンチ番号に東西南北の拡張方向をアルファベットの頭文字EWSNで示した(例：トレンチ3東側拡張区=T3E)。

6 遺構・遺物の縮尺は各実測図に明記した。方位は座標北であり、測量値は世界測地系による。

7 今回の調査に伴う遺物・図面・写真等の記録類は、君津市教育委員会が保管する。

8 調査組織は下記のとおりである。

《君津市教育委員会》

教育長：粕谷哲也

教育部長：丸 博幸

生涯学習文化課長：塚越直美 文化振興担当主幹：當眞紀子 文化振興係長：中花彩乃

主査(再)：矢野淳一 文化財主事：朝倉 唯 文化財主事：曾我真実子

9 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい(敬称略・五十音順)。

小高春雄、平塚憲一、星野温也、国土地理院地理空間情報部情報サービス課地理史料係

# 凡 例

1 本書で使用した地形図は、第1図 地形図「久留里」(1:25,000)国土地理院発行、第5図 君津市地形図「L-7」「L-8」(1:2,500)君津市発行である。

2 本書の第2図「久留里城縄張り図」は、小高春雄『君津の城』私家版2001による。第3図「寛保3年久留里城絵図(写)三の丸部分」、第4図「明治期久留里改組図 三の丸跡部分」、第17図「三の丸御屋形図」については所有者の許可を得て掲載した。また、第11図は、国土地理院の許可を得て、古地図コレクション20,000分の1迅速測図原図(フランス式彩色図)の明治15年作成「千葉県上総國望陀郡久留里市場町」を部分拡大して使用した。

3 本書で使用したトレンチ・遺構の略号は以下のとおりである。

T：トレンチ、SB：地業遺構、SK：土坑、SD：溝、SA：木杭遺構

4 遺構・遺物実測図のスクリーントーンは、下記のことを示す。



# 目 次

序文・例言・凡例	
第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 地理的・歴史的環境	1
第3節 久留里城の沿革	3
第4節 調査対象地	6
第5節 調査の方法	7
第6節 基本層序	7
第2章 調査成果	11
第1節 トレンチ調査	11
第2節 遺構	11
近世	
地業遺構	11
1号 (SB001)	
土坑	11
3号 (SK003)	
溝跡	12
1号 (SD001)	
木杭遺構	13
1号 (SA001)	
2号 (SA002)	
3号 (SA003)	
土塁跡	14
内堀跡	15
近代以降	
土坑	16
1号 (SK001)	
2号 (SK002)	
4号 (SK004)	
第3節 遺物	17
第3章 まとめ	21

## 挿図目次

第1図	久留里城跡の位置と周辺の遺跡……………	2	第10図	2・3号木杭遺構 (SA002・003) ……	13
第2図	久留里城縄張り図……………	3	第11図	明治15年迅速測図久留里城跡部分……………	14
第3図	寛保3年久留里城絵図(写) 三の丸部分 ……………	5	第12図	土塁跡・内堀跡土層断面図……………	15
第4図	明治期 久留里改組図 三の丸跡部分…	5	第13図	1・2・4号土坑 (SK001・002・004) ……………	16
第5図	調査対象地位位置図……………	6	第14図	陶磁器実測図……………	17
第6図	トレンチ・遺構配置図及び基本土層図 ……………	8	第15図	瓦実測図……………	18
第7図	1号地業遺構 (SB001) ……	10	第16図	瓦・鉄製品・石製品・木製品実測図…	19
第8図	3号土坑 (SK003) ……	10	第17図	三の丸御屋形図……………	22
第9図	1号溝跡 (SD001) 及び1号木杭遺構 (SA001) ……	12			

## 表目次

表1	黒田氏時代 城内施設の記事……………	4
表2	トレンチ及び遺構・遺物一覧表……………	9
表3	遺物観察表……………	20

## 図版目次

図版1	調査前の久留里城三の丸跡、久留里城二の丸跡より三の丸跡を望む
図版2	T3・T3E 1号地業遺構 (SB001)、T15 3号土坑 (SK003)
図版3	T27 1号溝跡 (SD001)、T26 1号木杭遺構 (SA001)・1号溝跡 (SD001)、 T33 3号木杭遺構 (SA003)
図版4	T29 土塁跡、T37 内堀跡、T21 東側断面、T20 1・2号土坑 (SK001・002)、 T10 4号土坑 (SK004)、作業風景
図版5	陶磁器、瓦
図版6	瓦
図版7	瓦、鉄製品・石製品・木製品

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査にいたる経緯

令和5年7月24日付けで、ISWIN JAPAN 株式会社より文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」の提出があった。開発目的は倉庫建設で、開発予定面積は4,548.24㎡である。開発区域は「周知の埋蔵文化財包蔵地内（久留里城跡）」で、開発着手前に確認調査を実施する必要がある旨を事業者の説明した。協議の結果、計画どおり事業を行うことになり、遺跡の規模及び性格を把握するための確認調査を実施することとした。確認調査は、令和5年11月13日から同年12月19日まで行った。

確認調査の結果、近世の地業遺構、溝跡、木杭遺構等が検出されたため、事業者と君津市教育委員会生涯学習文化課とで再度協議を行った。その結果、倉庫を建設する部分は、遺構を保護するため盛土工事を行い、また、それ以外の遺構が確認された箇所については現状保存する方針となった。なお、調査はすべて君津市教育委員会で行った。

## 第2節 地理的・歴史的環境（第1図）

今回、確認調査を実施した久留里城跡3は、君津市久留里字交代416番4の一部ほかの所在し、JR久留里線久留里駅の南東約1.2km、国道410号線沿いの高速バス久留里城三の丸跡停留所前の東側に位置する。

清澄山系を源とし東京湾に注ぐ小櫃川は流路延長88kmで、県の内陸部で最長の二級河川である。久留里は南総のほぼ中央に位置し、小櫃川が上流域から中流域へ移行する場所に当たる。中世戦国から近世まで存続した久留里城の跡は、曲流する小櫃川右岸の標高70～140mの「城山」と呼ぶ丘陵部と標高40～50mの河岸段丘に立地し、その範囲は東西1.2km、南北1.2kmにおよぶ。

城山の地質は、房総半島がまだ海底の頃の約60万年前以降に堆積した砂質シルト岩、シルト質砂岩を主体とする上総層群柿ノ木台層によって形成され、地中に浸透した水はこの地層に阻まれ、崖面の至るところで紋水が観察できる。また、城山西麓の急崖下を開けた段丘は、久留里Ⅲ面で約6千年前の縄文海進堆積面に対応する。

周辺の植生は、ウラジロガシ、スダジイを中心とする照葉樹林をはじめ、ウラジロ、アカシデなど多種の植物が見られる。

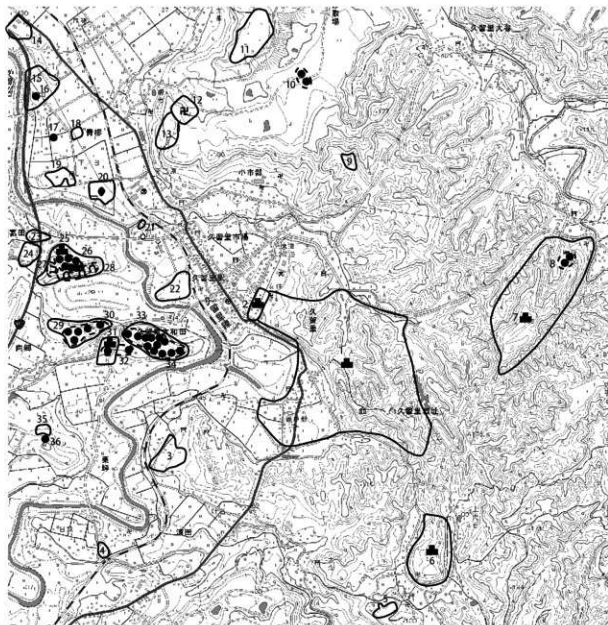
### 参考文献

『千葉の自然誌 本篇2 千葉県の大地』千葉県 1997

『君津市史 自然編』君津市 1996

『千葉県埋蔵文化財分布地図（4）-君津・夷隅・安房地区（改訂版）-』2000 千葉県教育委員会





No.	遺跡名	時代	立地	No.	遺跡名	時代	立地
1	久留里城跡	中・近世	丘陵・段丘	19	青柳宮ノ前遺跡	古墳	段丘
2	安住陣屋跡	近世	台地	20	青柳西の前遺跡	弥生・古墳	段丘
3	大門遺跡	縄文・弥生・古墳	段丘	21	青柳天王遺跡	平安	段丘
4	浦田上ノ台遺跡	縄文	段丘	22	寺後遺跡	縄文	段丘
5	怒田遺跡	縄文	台地	23	富田面遺跡	旧石器・古墳・奈良平安・中・近世	段丘
6	怒田段跡	中世	丘陵	24	向郷菩提遺跡	旧石器・縄文・奈良平安・中・近世	段丘
7	川谷岩跡	中世	丘陵	25	岩室城跡	中世	丘陵
8	下夕村塚群	中・近世	丘陵	26	日隈山古墳群	古墳	丘陵
9	勝負谷遺跡	古墳	丘陵	27	富田横穴群	古墳	丘陵
10	箕輪富士塚群	近世	丘陵	28	日隈山横穴群	古墳	丘陵
11	箕輪遺跡	縄文・古墳(後)・奈良平安	丘陵	29	向郷上野台遺跡	縄文・古墳	段丘
12	入定寺儀寺跡	中・近世	丘陵	30	上野台古墳群	古墳	段丘
13	郷倉遺跡	弥生(後)	丘陵	31	向郷陣屋	近世	台地
14	上新田猿山遺跡	平安・中世	段丘	32	松葉古墳群	古墳	微高地
15	青柳向台遺跡	縄文・弥生(中)・古墳・奈良平安・中世	段丘	33	御陣屋遺跡	古墳	台地
16	向台塚	中・近世	段丘	34	御陣屋古墳群	古墳	台地
17	鏡塚塚	中・近世	段丘	35	向郷遺跡	縄文	台地
18	青柳下原遺跡	古墳	段丘	36	寺ノ台古墳	古墳	丘陵

第1図 久留里城跡の位置と周辺の遺跡

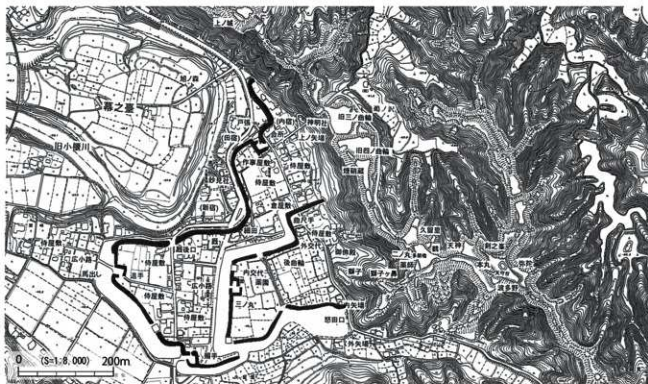
### 第3節 久留里城の沿革（第2～4図、表1）

久留里城が史料に初出するのは、戦国期の天文6年（1537）、西上総を支配していた真里谷武田氏の内紛に関係するもので、領内の城として久留里も巻き込まれている。武田氏の没落後、天文10年（1541）年代の中頃、安房国から上総国へ進出し、領土拡大を狙う里見義堯の居城となり、永祿3年（1560）と同7年（1564）、北条氏の久留里城攻めが行われている。後者の戦では、里見氏は敗北し久留里から撤退することになるが、後に奪還している。天正2年（1574）、義堯が没すると、里見氏領内の城として存続するが、同18年（1590）、豊臣秀吉の小田原合戦の終結後の国替えにより、上総国を含む関東6か国は徳川家康の支配するところとなる。

久留里城には大須賀忠政が3万石で入城、続く慶長7年（1602）には土屋忠直が2万石で入城、以後、利直が遺領を継ぐが、延宝7年（1679）、3代頼直（直樹）の時、改易され廢城となる。翌年、土屋氏の旧領は、上野国前橋の酒井氏の加増地となり、久留里の安住に陣屋（侍屋敷）を置き統治した。それから63年後の8代将軍徳川吉宗の治世、寛保2年（1742）7月、黒田直純が3万石で、上野国沼田から久留里へ所替えとなり、幕府から5千両を拝領し、田畑と化した古城地に城を築いた。

その後、黒田氏が代々遺領を継ぎ、9代直養<sup>なかつか</sup>の時、明治維新を迎えることとなった。黒田氏時代の城郭は、寛保3年（1743）5月、幕府に提出した『久留里城絵図（写）』によると、山上に本丸・二の丸、麓に内堀と外堀で囲む三の丸・外曲輪を配置するもので、本丸に二重櫓（天守）、二の丸に長屋塀（多間櫓）、三の丸と外曲輪に二重櫓各2箇所、大手（追手）門、搦手門、三の丸門、戸張（外張）門、また、この絵図に描かれていないが、三の丸に政庁・藩主の居所である「御屋形」（御殿）があった。

昭和52年（1977）、天守閣再建と資料館建設に伴い本丸跡と二の丸跡で発掘調査が行われた。調査の結果、二の丸跡から切り出したシルト岩を本丸の二重櫓、二の丸の長屋塀等の礎石に用いたことが判明したほか、本丸跡では里見氏時代の所産と考える柱穴も見つかっている。昭和53年、本丸跡に望楼型の天守閣が再建、翌年、二の丸跡に資料館が建設された。



小高春雄「君津の城、私塾版2001を加筆

\*ニシツク地名・通称が〔〕内が「久留里城地図」（酒井氏時代）、それ以外は「久留里藩制一冊」（黒田氏時代）

第2図 久留里城縄張り図

西暦	和暦	藩主	記 事
1743	寛保3	初代 直純	5. 築城給図・書付を幕府に提出する。 給図奥書「本丸・二之丸・三之丸・外曲輪、二重櫓5ヶ所・櫓門4ヶ所・衝門4ヶ所・柵形4ヶ所・虎口4ヶ所・木戸9ヶ所・橋4ヶ所板橋、三之丸居所家作・外曲輪大手門内外 侍屋敷・戸張門内腰曲輪 侍屋敷・安住古より侍屋敷並足輕屋敷、外曲輪大手門内・戸張門内腰曲輪、櫓」(『久留里城給図(写)』)。 6. 4 幕府、築城の許可を出す。 8.21 「本丸」で御初めを行う。
1744	延享元		9. 7 「三ノ丸屋形」の地祭りを行う。 10. 6 「三ノ丸屋形」の棟上げを行う。 ・城築場所奉行頭取 森清太夫光伸、「三之丸南櫓」の普請を担当する(『黒田家臣伝稿本』)。
1745	延享2		3. 4 「三之丸並土居・櫓、居所・家来の屋敷」は完成したが、「本丸・二之丸」は山上のため、容易に遊んでいないので、久留里入りの許可を幕府に請う。 3.23 仏殿道具を城内「仏殿」に入れる。 5.16 城内に鎮守「神明宮」を勧請する。 5. 城がほぼ完成し、久留里安住に仮住まいの諸役人等が城に移る。
1765	明和2		4.27 「大手御門」の柱建て・棟上げを行う。
1767	明和4		12.27 21時40分頃、「三ノ丸 内交代 20間長屋」1棟焼失する。
1770	明和7		7.16 「外腰侍屋敷」より失火、1軒焼失する。
1777	安永6	2代 直享	4.21 「二ノ御丸 御長屋櫓」の棟上げを行う。 ・「三之丸北の御櫓」の普請を行う(『丹公美談』)。 ・城築小奉行 橋部代六、「三之丸北ノ櫓(御櫓)」の普請を担当する(『黒田家臣伝稿本』)。
1778	安永7		9.12 「獅子御門」が完成する。 11. 1 獅子曲輪の獅子の右に「茶室」を建てる(『丹公美談』)。
1782	天明2		11.16 城山前部に「丹生明神」を勧請する。
1791	寛政3	4代 直温	10. 2 明け方「外交代長屋 30間」焼失する。
1800	寛政12		8.13 暴風雨により「表厨所并侍屋敷」大破する。
1801	享和元		4.15 午前3時40分頃、上総地震(寛政5)により、「本丸土居・土櫓、二ノ丸、三之丸土櫓・門、大手門・土櫓、獅子門・土櫓」などが破損する。
1842	天保13	7代 直静	11. 城内橋手に藩校「三近塾」を設立する(『旧久留里藩学制沿革概録』)。
1844	弘化元		6. 「本丸櫓」の修復を権部無事右衛門に命じる(『黒田家臣伝稿本』)。
1855	安政2	8代 直和	10. 2 午後10時頃、安政の江戸地震(寛政9)により、「本丸・二の丸・三の丸の土櫓・櫓・櫓・門・土蔵・侍屋敷・長屋」などが破損する(『山城会報第5号』)。
1868	慶応4	9代 直義	閏4.10 官軍、「武具庫」を封印する(『山城の夢』)。
1871	明治4		5. 戸張に「政庁(藩庁)」が落成する(『山城の夢』)。 7.14 廣瀬置鉄 8.16 久留里県、築城伺いを東京府へ提出する(『山城の夢』)。
1872	明治5		2.15 兵部省官吏、旧城を点検し、「櫓・櫓・櫓」等が瓦により、払い下げられる。以降、城郭を没して、桑田となる(『山城の夢』)。
1873	明治6		5.17 大谷の村人、「御櫓」の取り壊しをする(『朝生家日記』)。

※資料名のない記事は『御明細録-上総久留里藩主黒田氏の記録-』上総古文書の会 2006による。

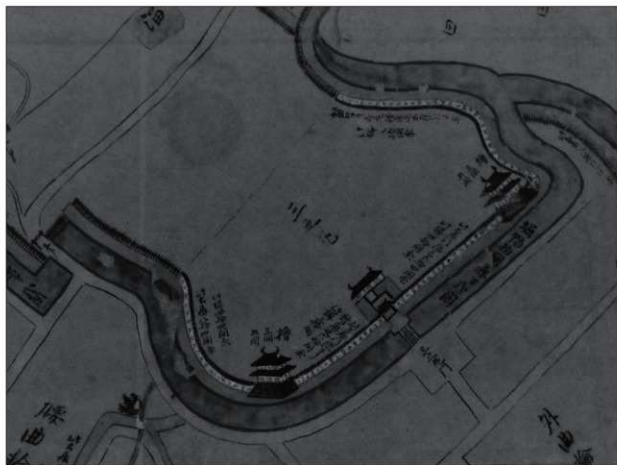
表1 黒田氏時代 城内施設の記事

参考文献

『上総久留里城』久留里城址発掘調査団 1979

『久留里城ガイドぶっく』君津市立久留里城址資料館 2013

『君津市史 自然編』君津市 1996



第3図 寛保3年 久留里城絵図(写) 三の丸部分



第4図 明治期 久留里改租図 三の丸跡部分

#### 第4節 調査対象地（第5図、図版1）

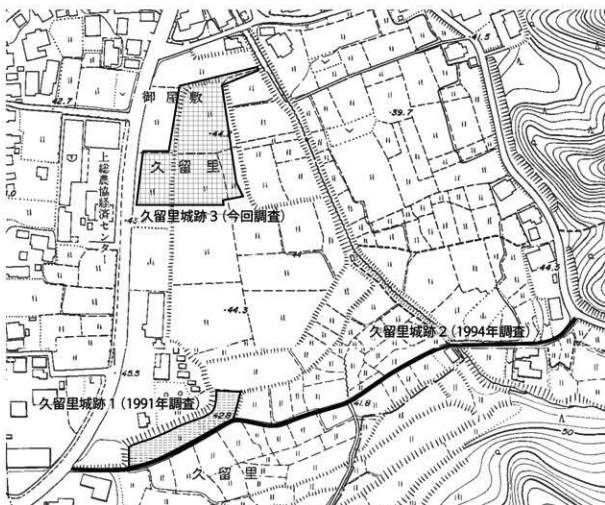
調査対象地の久留里城跡3は、近世黒田氏時代の三の丸跡北側に位置する。対象地外の東側、1.20 mほど低くなっている場所は「菓園」の跡で、その下に戸張川が北西へ流れ、小櫃川に河水を落としている。西側は「三之丸門」と「内堀」の跡で、後者は地割に痕跡を残している。現在、対象地は休耕田で標高は43.00 m前後、南西の内堀跡が42.40 mである。城に関係する「大手内」「大手外」などの小字名を残す。対象地は小字名を「交代」と呼び、江戸の屋敷から城主に随行した家臣の宿舎「交代長屋」に因むものという<sup>(1)</sup>。

対象地周辺での久留里城跡関係の発掘調査（確認調査）は、平成3年（1991）に駐車場造成に伴い三の丸跡南側の内堀跡から分岐した外堀跡の調査<sup>(2)</sup>が実施され、現地表面から深さ1.50～2.00 mで堀底を検出した。平成6年（1994）には市道整備に伴い、三の丸跡南側の内堀跡の外周の調査<sup>(3)</sup>が行われ、近世の溝状遺構を検出している。

註（1）『久留里城誌』久留里城再建協力会 1979

（2）『久留里城跡』『平成3年度 千葉県君津市内遺跡発掘調査報告書』君津市教育委員会 1992

（3）『発掘調査報告 久留里城跡』『君津都市文化財センター年報No.13-平成6年度-』財団法人君津都市文化財センター 1996



第5図 調査対象地位置図

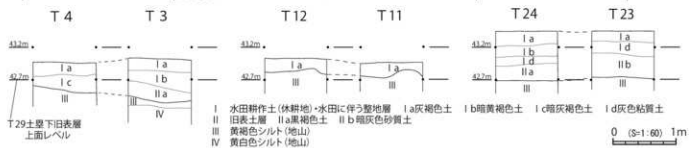
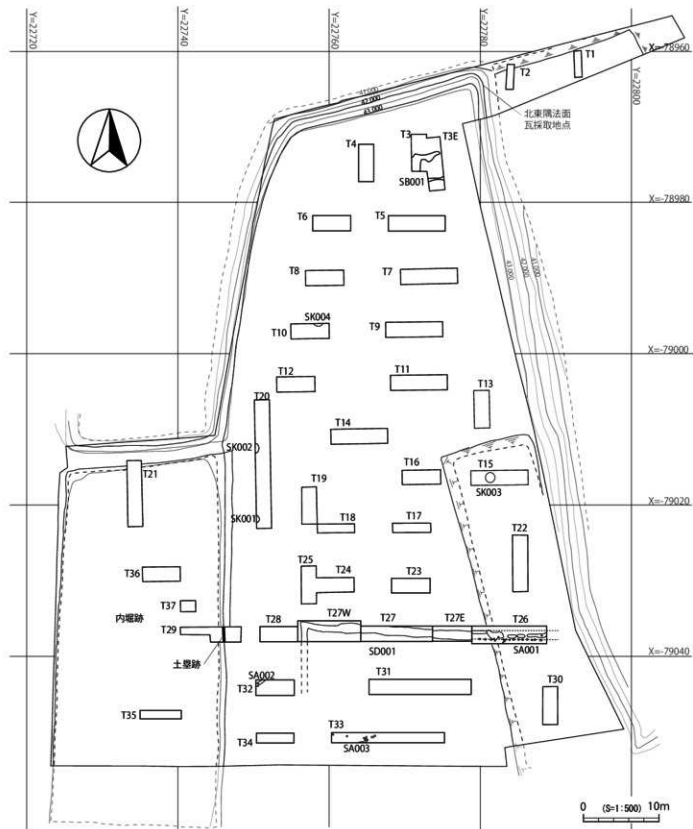
## 第5節 調査の方法（第6図、図版1）

調査対象地4, 548.24 m<sup>2</sup>内の遺構の有無と性格を把握するため、37本のトレンチを設定し調査を進めた。また遺構を検出したトレンチでは、広がり見するため3本の追加拡張トレンチを入れている。確認調査の面積は、505.9 m<sup>2</sup>である。調査を実施するにあたり、公共座標に基づく基準点測量は専門業者が行い、この杭を用いて現地での平面図・断面図などの実測作業を行った。今回の対象地が、城跡ということもあり、調査前に平板測量による対象地の現況図の作成を行った。その際、東・西・北側に存在する法面の等高線も測定し記入した。各トレンチの調査は、遺構の確認面まで重機により掘り下げた後、人力による精査、遺構の検出を行った。しかし、対象地北東部のトレンチ1・トレンチ2（以下、トレンチはT1・T2と表記）については、狭小で法面の下にあることから、重機の掘削を断念し人力で掘削を行っている。遺構や遺物の出土状況の記録は、平板測量、50 cm方眼設定による平面図の作成及び土層断面図の作成を行った。写真撮影については、デジタルカメラを使用した。

調査終了後は重機により排土を埋め戻して現状復帰し、現地作業を終えた。

## 第6節 基本層序（第6図）

基本層序は調査対象地の北側列、中央列、南側列の3か所で観察した。北側列のT3・T4では、現地表面から約0.20 mまでが旧水田耕作土（灰褐色土）のI a層、T3では東側に地盤が下がっているため、I a層の下に0.15～0.30 mの整地層（暗黄褐色土）I b層が見られる。その下の黄褐色土粒を少量含んだ黒褐色土のII a層は、上面の標高が42.70 mで、T29で検出した土層下の旧表土上面の標高とほぼ一致する。第3図の久留里城絵図（写）等によるとT3の北側付近には、土塁が存在したことから、II a層はT29と同様の性格と考える。T4のI a層の下は、瓦片を少量、炭化粒を微量に含む暗灰褐色土のI c層で整地している。遺構の確認面は地山の黄褐色シルトのIII層上面で、現地表面からの深さは、T3で0.55 m、T4で0.40 m。法面下のT1の現地表面はT3よりも1.25 m低く、畑耕作土（暗褐色土）のI a'層を0.15～0.25 m掘り下げると地山の黄白色シルトのIV層上面となる。中央列のT11・T12は、厚さ0.15～0.20 mのI a層の下が地山のIII層となる。南側列のT24ではI a層の下にI b層、灰色粘質土のI d層、II a層、地山のIII層上面、T23ではI a層の下にI d層、暗灰色砂質土のII b層、地山のIII層上面となる。段差下のT22の現地表面はT23より0.55 m低い。T22はI a層の下に黒褐色土を少量含む暗黄褐色土のI b'層、黒褐色土のII a層、地山のIII層上面となる。現地表面から確認面までの深さは、T24で0.75 m、T23で0.70 m、T22で0.60 mである。

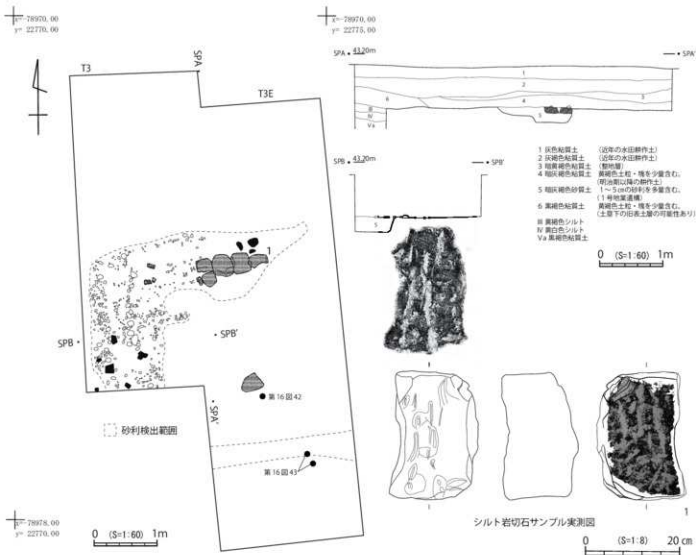


第6図 トレンチ・遺構配置図及び基本土層図

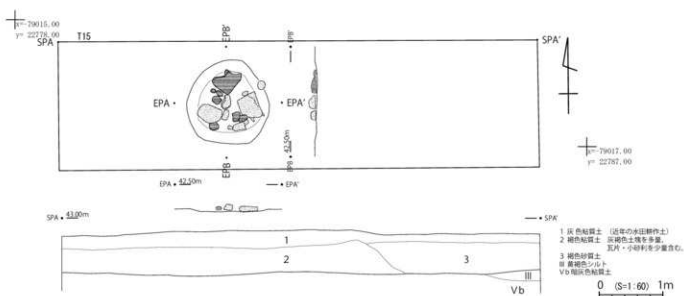
No.	幅×長さ (m)	礎部深さ (m)	遺構	遺物
T 1	1.00 × 3.30	0.15		磁器染付皿 1 (15.5 g)
T 2	1.00 × 3.30	0.15		磁器白磁器種不明 1 (4.8 g)
T 3	2.00 × 5.00	0.65	1号地業遺構 (SB001)	枕瓦 7 (2.8 kg)、土師器坪 1 (2.4 g)・兼 1 (2.2g)
T 3 E	2.00 × 7.00	0.65	1号地業遺構 (SB001)	陶器碗 2 (90.7 g)、土師器坪 1 (2.1 g)、軒枕瓦軒丸部 1 (160 g)・軒枕瓦軒平部 3 (360 g)・枕瓦 14 (2.9 kg)、鉄製品胡巻釘 (3.5 g)・用途不明品 (60.4g)
T 4	2.00 × 5.00	0.40		枕瓦 9 (790 g)
T 5	2.00 × 7.50	0.40		枕瓦 1 (10 g)
T 6	2.00 × 5.00	0.15		枕瓦 1 (160 g)
T 7	2.00 × 7.50	0.30		播鉢 1 (29.3 g)、枕瓦 4 (300 g)
T 8	2.00 × 3.00	0.15		枕瓦 3 (370 g)
T 9	2.00 × 7.50	0.45		丸瓦 1 (320 g)・枕瓦 4 (490 g)
T 10	2.00 × 5.00	0.15	4号土坑 (SK004)	陶器蓋 1 (112.1 g)・播鉢 3 (65.9 g)、磁器染付碗 7 (200.5 g)、土師器坪 5 (37.7 g)、軒枕瓦軒丸部 1 (25 g)・軒枕瓦軒平部 5 (1.3 kg)・丸瓦 6 (830 g)・枕瓦 106 (15.2 kg)
T 11	2.00 × 7.50	0.20		枕瓦 2 (160 g)
T 12	2.00 × 5.00	0.15		枕瓦 1 (6 g)
T 13	2.00 × 5.00	0.30		枕瓦 1 (1 g)
T 14	2.00 × 7.50	0.35		丸瓦 1 (150 g)・枕瓦 4 (980 g)
T 15	2.00 × 7.50	0.50	3号土坑 (SK003)	磁器染付小坪 1 (9 g)、枕瓦 1 (210 g)
		土坑外	磁器白磁小坪 3 (16.8 g)、播鉢 1 (17.1 g)、鬼瓦 1 (80 g)・丸瓦 3 (920 g)・枕瓦 54 (10.2 kg)	
T 16	2.00 × 5.00	0.50		枕瓦 1 (10 g)
T 17	2.00 × 5.00	0.65		
T 18	2.00 × 5.00	0.70		
T 19	2.00 × 5.00	0.65		枕瓦 3 (325 g)、石製品砥石 1 (39.5 g)
T 20	2.00 × 17.00	0.35	1号土坑 (SK001)	磁器染付碗 1 (3.9 g)、鬼瓦 1 (300 g)・軒丸瓦 1 (160 g)・丸瓦 4 (140 g)・軒枕瓦軒丸部 1 (60 g)・軒枕瓦軒平部 2 (730 g)・枕瓦 117 (9.2 kg)
			2号土坑 (SK002)	鬼瓦 1 (220 g)・軒枕瓦軒平部 1 (10 g)・枕瓦 22 (1.2 kg)、鉄製品 両面金具 1 (4.1 g)
			土坑外	土師器坪 1 (3.4 g)、軒丸瓦 1 (150 g)・丸瓦 2 (295 g)・枕瓦 71 (3 kg)
T 21	2.00 × 8.80	0.95	内堀跡	
T 22	2.00 × 7.50	0.60		
T 23	2.00 × 5.00	0.70		枕瓦 3 (205 g)
T 24	2.00 × 5.00	0.75		
T 25	2.00 × 5.00	0.75		土師器坪 1 (6.6 g)
T 26	2.50 × 10.00	0.40	1号溝 (SD001)	陶器土瓶蓋 1 (30.9 g)・播鉢 1 (20.2 g)、枕瓦 2 (250 g)
		0.80 ~ 1.00	1号水坑遺構 (SA001)	
T 27	2.00 × 10.00	0.55	1号溝 (SD001) 溝外	鬼瓦 4 (600 g)・軒枕瓦軒平部 1 (350 g)・丸瓦 1 (150 g)、枕瓦 14 (1.8 kg) 播鉢 1 (54.3 g)、瓦 2 (160 g)・丸瓦 1 (385 g)・枕瓦 31 (4.2 kg)
T 27 E	2.00 × 5.00	0.70	1号溝 (SD001) 上面	枕瓦 8 (2.9 kg)
T 27 W	2.50 × 8.00	0.65	1号溝 (SD001) 上面	枕瓦 71 (12.4 kg)
T 28	2.00 × 5.00	0.70		枕瓦 1 (59 g)
T 29	2.00 × 4.00	0.30	土堀跡	
	1.00 × 4.00	0.70	内堀跡	
T 30	2.00 × 5.00	0.60		
T 31	2.00 × 13.5	0.60		桶底板 1 (510.6 g) 空裏に内蔵不明書あり
T 32	2.00 × 5.00	0.55	2号水坑遺構 (SA002)	枕瓦 14 (3.6 kg)
T 33	1.30 × 15.00	0.50	3号水坑遺構 (SA003)	軒枕瓦 1 (380 g)・軒枕瓦軒平部 1 (15 g)・枕瓦 5 (1.8 kg)
T 34	1.30 × 5.00	0.80		軒枕瓦軒平部 2 (440 g)・丸瓦 2 (1.3 kg)・枕瓦 9 (860 g)
T 35	1.00 × 5.50	0.50	内堀跡	
T 36	2.00 × 5.00	0.80	内堀跡	
T 37	1.50 × 2.00	0.70	内堀跡	
三の丸 北東隅法面 (三の丸 NE 法) 探取の瓦				軒枕瓦軒平部 1 (250 g)・丸瓦 1 (330 g)・枕瓦 7 (1.6 kg)

表 2 トレンチ及び遺構・遺物一覧表





第7図 1号地業遺構 (SB001)



第8図 3号土坑 (SK003)

## 第2章 調査成果

### 第1節 トレンチ調査（第6図、表2）

調査対象地に37本のトレンチを設定した。調査は北東部のT1・T3から開始し、南側のT33・T34に向け漸次進み、最後に西側の内堀跡のT35からT21の順に実施した。またこの他、トレンチで確認した遺構の広がりを把握するため、T3E、T27E・T27Wの3本のトレンチを追加設定し調査を行った。

確認調査の結果、近世の地業遺構（SB001）1基、土坑（SK003）1基、溝跡（SD001）1条、木杭遺構（SA001～003）3箇所、土塁跡1条、内堀跡1条、近代以降の土坑（SK001・002・004）3基を検出した。

### 第2節 遺構

#### 近世

##### 地業遺構

#### 1号 SB001（第7図、図版2）

**位置・状況** 調査対象地「三の丸跡」の北東隅に位置する。T3とその東側の拡張区T3Eで、建物方向に合わせて細長く溝状に掘り、砂利を入れ、切石を置いた布掘地業の北・南・西側を検出した。現地表面から遺構確認面までの深さは約0.65mで、標高は42.35m。上面には明治期以降の耕作土と見られる黄褐色土粒・塊を少量含んだ暗灰褐色粘質土が堆積していた。

**規模・形状等** 東西4.00m以上（2間以上）、南北3.65m（約2間）で、東側の法面方向に続く、東西棟の建物が想定される。布掘の幅は、北側が0.80～1.00m、南側が0.30～0.50m、西側が0.90～1.10m、確認面からの掘り込みの深さは、北側が0.10～0.25m、西側が0.25m。北東側では一辺20～40cm、厚さ10～15cmのシルト岩の切石が5箇掘えられていた。他は1～5cm大の砂利を多量に含んだ暗灰褐色砂質土を溝の中に充填し、上面には比較的大きめの砂利を敷き、最大で長さ18cmのものも確認できた。また、割れた瓦が地業の上面で少し出土しているが、砂利とともに埋め込んだといったものではない。1のサンプル採取したシルト岩切石の大きさは、長さ27cm、幅19cm、厚さ11.2～15cmで、表と裏にノミの痕跡が認められた。

##### 土坑

#### 3号 SK003（第8図、図版2）

**位置・状況** 対象地中央の東側、T15の中央西寄りで検出した。現地表面から遺構確認面までの深さは約0.50mで、標高は42.20m。確認面で切石が集中する箇所を検出した。これらの石は投げ込まれたものではなく平らに置かれていた。地業遺構の可能性もあるが、周囲に同様のものが見られず土坑として調査した。上面には灰褐色土塊を多量、瓦片・小砂利を少量含んだ褐色粘質土が堆積していた。

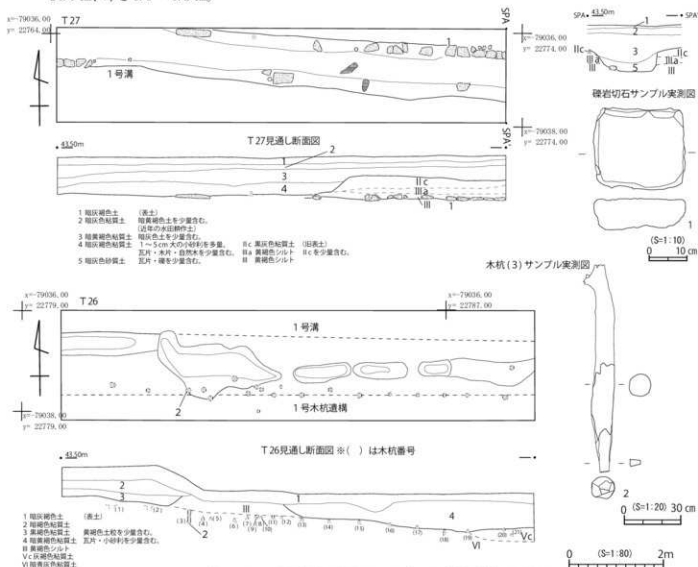
**規模・形状等** 径1.30m、深さ0.05mの不整な円形で、長さ40cm、幅20～30cm、厚さ8～10cmのシルト岩1個、礫岩2個を三角形に据え、その間に8～25cmのシルト岩と礫岩を詰めていた。

## 溝跡

### 1号 SD001 (第9図、図版3)

**位置・状況** 対象地の南側のT 26、T 27で検出した。T 27では切石が東西方向のトレンチに沿うように複数見られ、調査の結果、溝の護岸として置いた石組の列と判明した。上面には瓦片・礫を少量含んだ暗灰色砂質土が堆積していた。東側のT 26では、溝の平面が確認できず、掘り下げを進め、溝の底面部分を検出した。石組はなく、溝南側に木杭列の1号木杭遺構を検出した。さらに溝の方向や性格を知るため、T 27の東側と西側をそれぞれ拡張したところ、T 27西側拡張区のT 27Wで、西側に向っていた溝が南側方向に屈曲する隅を検出した。現地表面から遺構確認面まで、T 27が深さ約0.55m、標高42.70m、東側のT 26が深さ約0.40m、標高42.45mで、東側に地形が下がる。

**規模・形状等** T 27WからT 26で検出した東西方向の溝の総延長は33.00m以上で、隅から南側方向に延びる溝は、約2.00m検出した。溝は、T 27の東側で上幅1.25m、下幅0.70m、深さ0.40m、断面形は逆台形状で、T 26の東側が、上幅1.10m・下幅0.25m、深さ0.60m、断面形は葉研状であった。T 27で検出した石組列は、ほとんど失われていたが、トレンチ北東側では、軟弱な礫岩の切石が並ぶ様子が顕著に見られた。また、石組は溝底面に接する根石だけで、二段目を積んだ箇所はなかった。根石と対岸の根石での溝幅は0.55m。切石の大きさ・形は一定せず、長さ5～55cm、幅5～24cm、厚さ5～10cm、形も三角、四角と不揃いである。1のサンプル採取した礫岩切石の大きさは、長さ21.7cm、幅24.5cm、厚さ6.8～8.2cm。



第9図 1号溝跡 (SD001) 及び1号木杭遺構 (SA001)

## 木杭遺構

### 1号 SA001 (第9図、図版3)

**位置・状況** T 26 の1号溝跡 (SD001) の南辺に沿って、木杭 21 本を検出した。北辺に木杭がない理由は、わからないが、1号溝跡南側の護岸に関係したものと考えたい。現地表面から遺構確認面まで、西側で深さ 0.80 m、標高 42.50 m、西側で深さ 1.60 m、標高 41.90 m。上面には瓦片と小砂利を含んだ暗黄褐色粘質土が堆積していた。

**規模・形状等** 西側の木杭 (1) から東側の木杭 (21) まで、芯々の長さは 8.40 m である。木杭の径は 5 ~ 12 cm。重機によるトレンチ掘り下げの際に木杭 (3) が抜けたため、サンプル採取した。2 の木杭 (3) の長さは 109.8 cm、最大直径は 12.3 cm。針葉樹の杭で中位から上位にかけては、樹皮を残したまま頭部は細くなり、加工せず自然木であったのに対し、中位から下位は断面が円形で、樹皮を剥ぎ、先端部を四面削って尖らせていた。

### 2号 SA002 (第10図)

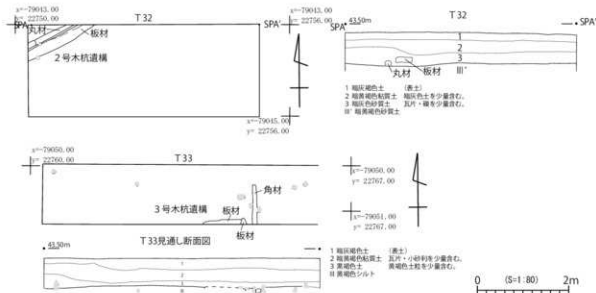
**位置・状況** 対象地の南側の T 32 の北西隅で、南西から北東方向に横たわる丸材 1 本と板材 1 枚、板材を押さえる木杭 2 本を検出した。足場板と推定される。現地表面から遺構確認面までの深さ 0.55 m、標高 42.65 m。上面には瓦片と礫を少量含んだ暗灰色砂質土が堆積していた。

**規模・形状等** 板材の長さは 168 cm 以上、幅 22 ~ 26 cm、厚さ 12 cm、丸材の長さは 115 cm 以上、径 13 cm、木杭の径 6 ~ 8 cm。

### 3号 SA003 (第10図、図版3)

**位置・状況** 対象地の最南端、T 32 の西半分で、南北方向に置かれた角材 1 本、それを押さえる木杭 2 本、南北と東西方向に置かれた板材 2 枚、他に木杭 5 本を検出した。現地表面から遺構確認面までの深さ 0.50 m、標高 42.70 m。上面には黄褐色土粒を量含んだ黒褐色粘質土が堆積していた。

**規模・形状等** 角材は長さ 87 cm 以上、縦 15 cm、横 10 cm、東西方向の板材の長さは 90 cm、木杭の径 7 ~ 10 cm。



第10図 2・3号木杭遺構 (SA002・003)

#### 土塁跡（第6・11・12図、図版4）

**位置・状況** 対象地の南西部、T 29東側で土塁跡を検出した。南北方向の畦畔に直交するトレンチを入れ、土層断面を観察した結果、土塁構築以前の旧表土層と思われる暗灰色土層、黄褐色土や黒褐色土を主とした盛土が確認できた。旧表土層上面の標高は42.70 m。

**規模・形状等** 土塁底辺の「敷」の長さは2.10 m以上、確認できた盛土の高さは0.55 m、法面角度は37度。今回は、1箇所だけの調査となったが、対象地の北側と西側の畦畔沿いに土塁の痕跡が残されているものと推定される。『久留里城絵図（写）』奥書に「三之丸 土居高サ武間、敷六間」と記され、土塁の高さは約3.60 m、敷は約10.90 mとする。明治15年作成の2万分の1迅速測図原図（第11図）には、土塁がまだ存在している。平成3年（1991）に地元の方に聞き取り調査を行ったところ、明治末年には土塁はほぼ消滅していたという。

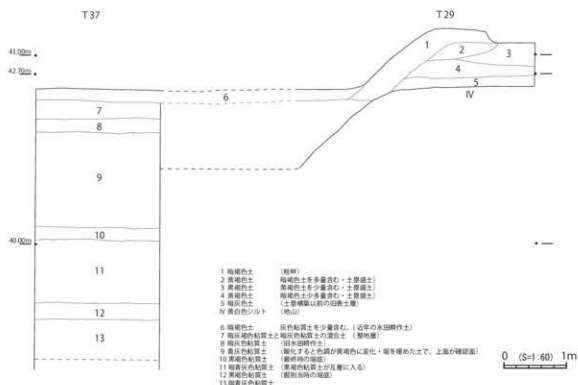


第11図 明治15年迅速測図久留里城跡部分

## 内堀跡（第6・11・12図、図版4）

**規模・形状等** 対象地の南西部のT 21、T 29 西側、T 35～T 37 で堀の上面を検出した。またT 37 では、重機による掘り下げを行い、堀の深さを調査した。現地表面から堀上面まで、深さ0.70 m、標高41.80 m。また、T 21 の北側部分には、西側の国道側から堀跡を通り、対象地の三の丸跡に出入りする幅1.50 mほどの道があるが、この場所は『久留里城絵図（写）』では、堀を「橋」で渡し、「三之丸門」の「舁形」に至る通路である。明治以降、堀は埋められたが橋の部分は、道として利用されていたことが迅速測図原因等からも窺えるので、道に直交する南北方向のT 21 を入れ調査を行った。

**規模・形状等** 『久留里城絵図（写）』に「堀幅拾間 深サ式間」と記され、堀の幅約18.20 m、深さ約3.60 mとする。現状では、東側の法面から西側の国道410号線沿いの法面下まで23.00～24.00 mあり、絵図より幅広となっている。深さについては、T 37 で土層断面観察をした結果、現地表面から深さ3.70 m下に堆積した黒褐色粘質土層が堀底と考えられる。土塁の底辺からの深さは3.90 mとなる。T 21 道部分の断面観察の結果、深さ0.95 m、標高41.70 mで堀の上面、その上に堀埋没後の水田耕作土、盛土整地層の順となり、道の硬質面は確認できなかった。昭和40年代後半に現在の国道は堀跡に沿って造られているので、その際、国道の面に合わせ、水田に出入りする道をかさ上げしたものと思われる。



第12図 土塁跡・内堀跡土層断面図

## 近代以降

### 土坑

#### 1号 SK001 (第13図、図版4)

**位置・状況** 対象地の中央、T 20 の南側で瓦が集中する箇所があり、瓦の廃棄土坑と判明した。現地表面から遺構確認面までの深さは約 0.60 m、標高は 42.15 m。上面には瓦や小砂利を少量含んだ暗灰褐色砂質土が堆積していた。T 20 付近は「三之丸門」の「舁形」があった場所にあたる。

**規模・形状等** 南北 1.18 m、東西 0.42 m 以上、深さ 0.32 m の楕円形の土坑で、東側部分を検出した。土坑の底面付近から上位にかけて、多量の瓦片や礫を含んだ黒灰色粘質土で埋まっていた。

#### 2号 SK002 (第13図、図版4)

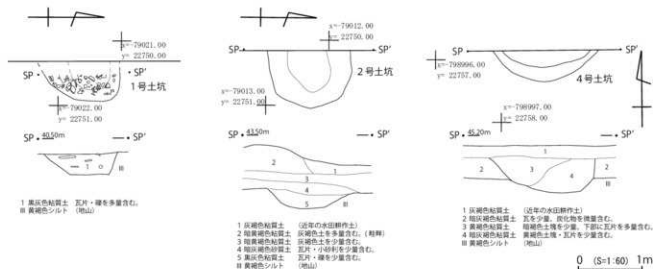
**位置・状況** 対象地の中央、T 20 の中央北寄りで瓦の範囲を検出し、1号土坑 (SK001) と同様、瓦の廃棄土坑と判明した。現地表面から遺構確認面までの深さは約 0.50 m、標高は 42.55 m。上面には瓦片や小砂利を少量含んだ暗灰褐色砂質土が堆積していた。

**規模・形状等** 南北 1.28 m、東西 0.76 m 以上、深さ 0.22 m の楕円形の土坑で、東側部分を検出した。少量の瓦や礫を含む黒灰色粘質土で埋まっていた。

#### 4号 SK004 (第13図、図版4)

**位置・状況** 対象地の中央北寄り、T 15 の東側で検出した楕円形の土坑である。当初は水田耕作土下の瓦を少量、炭化物を微量含んだ暗灰褐色粘質土の包含層と考えたが、調査が進む中で掘り込みが確認できたことから瓦の廃棄土坑と判断した。現地表面から遺構確認面までの深さは約 0.20 m で、標高は 41.85 m。

**規模・形状等** 南北 0.50 m 以上、東西 1.65 m (土層断面の計測)、深さ 0.55 m (土層断面の計測) の土坑で、南側部分を検出した。下位に多量の瓦が見られた。暗灰褐色粘質土、黄褐色粘質土で埋まっていた。



第13図 1・2・4号土坑 (SK001・002・004)

### 第3節 遺物（第14～16図、表3、図版5～7）

遺物は近世の陶磁器、瓦、鉄製品（用途不明品・頭巻釘・両頭金具）、石製品（砥石）、木製品（桶底板）が出土した。実測した遺物の詳細は観察表にまとめた。また、図示していないが古墳時代後期の土師器環・甕の小破片が、T3・T3E・T10・T20・T25の下層の堆積土に混入していた。

**陶器** 瀬戸・美濃系の碗2点（90.7g）・壺1点（112.1g）・播鉢4点（86.1g）、丹波系と見られる播鉢1点（29.3g）、産地不明の土瓶1点（30.9g）・播鉢2点（71.4g）が出土した。

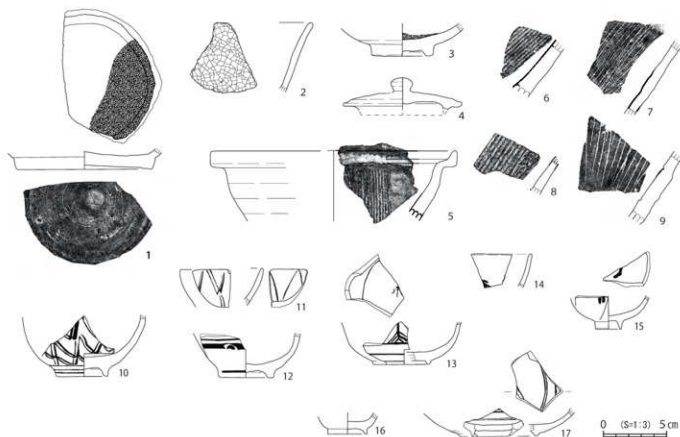
**磁器** 肥前系の染付碗8点（204.4g）染付小坏1（9g）・染付皿1（15.5g）・白磁小坏3点（16.8g）・白磁器種不明品1点（4.8g）で、ほぼ18世紀代の範疇に入るものである。

**瓦** 鬼瓦5点（680g）、鬼瓦の可能性ある破片2点（520g）、冠瓦2点（160g）、軒丸瓦2点（310g）、丸瓦22点（4.82kg）、軒棧瓦1点（380g）、軒棧瓦軒丸部3点（245g）、軒棧瓦軒平部16点（3.46kg）、棧瓦591点（74.92kg）が出土した。軒棧瓦軒平部の唐草文は、17点中13点が江戸式、3点が大坂式、1点が不明である。江戸式を分類すると、加藤ⅡGa・山崎Ⅲ-1段階が9点、加藤ⅠLa・山崎Ⅲ-3段階が3点、山崎Ⅴ段階が1点となる。

#### 参考文献

加藤 晃「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開—軒平瓦・軒棧瓦の瓦当文様の変遷—」『史学研究集録』國學院大學日本史学専攻大学院会 1989

山崎信二『近世瓦の研究』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 2008



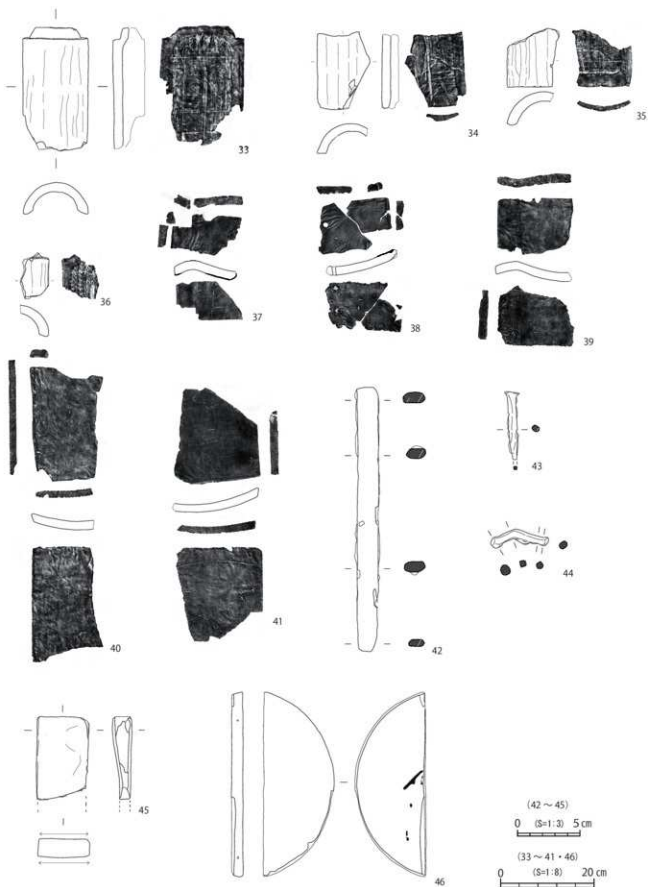
第14図 陶磁器実測図





第 15 图 瓦实测图

0 (S=1:4) 10 cm



第16図 瓦・鉄製品・石製品・木製品実測図

陶器						
No.	出土地	器種	部位・遺存率	計測値 (cm)	産地	特徴
1	T 10 SK004	甕	底部 1/2	高台径 10.6, 現存高 1.4	瀬戸・美濃系	別出し高台, 内面一部胎釉, 外面緑たれ, 粘土黄白色
2	T 3 E	瓶	口縁部	—	瀬戸・美濃系	内外面に灰釉・黄入, 粘土黄白色
3	T 3 E	瓶	高台 1・腰 1/3	高台径 5, 現存高 2.6	瀬戸・美濃系	内面に灰釉, 粘土黄白色, 高台・腰は無釉
4	T 26	土瓶	蓋 1/6	復元径 9.4, 現存高 2.6	不明	蓋面に灰釉, 粘土赤褐色
5	T 10 SK004	標鉢	口縁部 1/8	復元径 19.6, 現存高 3.6	瀬戸・美濃系	口縁部内面が受け口状, 内外面に緑釉, 粘土黄白色
6	T 10 SK004	標鉢	体部	—	瀬戸・美濃系	粘土黄白色
7	T 7	標鉢	体部	—	丹波系 a	外面は赤味がやや濃くなる, 粘土暗灰色
8	T 15	標鉢	体部	—	不明	内外面, 粘土とも赤味がかなり混ざる
9	T 27	標鉢	体部	—	不明	内外面, 粘土とも濃い褐色
磁器						
No.	出土地	器種	部位 遺存率	計測値 (cm)	産地	特徴
10	T 10 SK004	瓶	高台 1・体部 1/3	高台径 4.1, 現存高 4.8	肥前系	胎付 外面体部に二重割目文・圓線 1, 高台に圓線 2
11	T 10 SK004	瓶	口縁部 1/10	復元口径 10	肥前系	胎付 外面に二重割目文, 内面に一重割目文
12	T 10 SK004	瓶	高台 4/5・体部 1/5	高台径 4.4, 現存高 3.5	肥前系	胎付 外面体部に圓線 2, 高台に圓線 1, 裏に斜目
13	T 10 SK004	瓶	高台 1/4・体部 1/7	復元高台径 4.4, 現存高 3.4	肥前系	胎付 外面体部に矢羽文・圓線 1, 高台に圓線 1, 見込みに「磁」文字の圓線 1
14	T 20 SK001	瓶	口縁部	—	肥前系	胎付 外面体部
15	T 15 SK003	小坏	高台 1/4・体部 1/7	復元高台径 2.1, 現存高 2.7	肥前系	胎付 外面体部, 見込み
16	T 15	小坏	高台 2/3	高台径 3.1, 現存高 1.7	肥前系	白磁
17	T 1	瓶	高台	高台径 6, 現存高 2.2	肥前系	胎付 内面に圓線 5
瓦						
No.	出土地	種類	計測値 (cm)	焼成	色調	特徴
18	T 27 SD001	瓦瓦	現存長 6.2, 現存幅 5.2, 厚さ 3.1	良好	黒色	
19	T 27 SD001	瓦瓦	現存長 9.2, 現存幅 10.1, 厚さ 1.9 ~ 3.1	良好	黒色	黒田氏家紋「舟形に月」の左上
20	T 27 SD001	瓦瓦	現存長 12, 現存幅 8.1, 厚さ 2.3 ~ 4.3	良好	黒色	黒田氏家紋「舟形に月」の右上
21	T 20 SK001	瓦瓦 a	現存長 11.7, 現存幅 12.2, 厚さ 1.8 ~ 2.7	良好	灰黒色	釘穴 1ヶ所
22	T 20	軒丸瓦	圓線部現存長 4.5・現存幅 13.2, 厚さ文様区 1.9・筒縁 2.8, 筒縁復元径 16 cm	良好	灰黒色	
23	T 34	軒丸瓦	軒丸部径 6.6, 文様区径 4.1, 厚さ文様区 1.4 ~ 1.6・棧 1.9	良好	灰褐色	巴文右巻き
24	T 33	軒丸瓦	軒丸部径 6.4, 文様区径 4.2, 厚さ瓦当 1.3・棧 1.9, 軒平部瓦当長 4.3, 文様区長 2.5, 厚さ瓦当 1.3 ~ 2.3・平 1.9	良好	黒色	巴文右巻き 唐草文 江戸式 II 6a・山崎 III-1
25	T 34	軒丸瓦	軒平部瓦当長 4.2, 文様区長 2.3, 厚さ瓦当 1.6 ~ 2.0・平 1.8	良好	灰黒色	唐草文 江戸式 II 6a・山崎 III-1
26	北東岡山	軒丸瓦	軒平部瓦当長 4.2, 文様区長 2.2, 厚さ瓦当 1.4 ~ 1.6・平 1.7	良好	灰黒色	唐草文 江戸式 II 6a・山崎 III-1
27	T 20 SK001	軒丸瓦	軒平部瓦当長 4.4, 文様区長 2.2, 厚さ瓦当 1.6 ~ 2.2・平 1.9	良好	灰黒色	唐草文 江戸式 I 1a・山崎 III-3
28	T 27 SD001	軒丸瓦	軒平部瓦当長 4.4, 文様区長 2.1, 厚さ瓦当 1.8 ~ 2.1・平 1.8	良好	灰黒色	唐草文 江戸式 I 1a・山崎 III-3
29	T10 SK004	軒丸瓦	軒平部瓦当長 3.9, 文様区長 1.8, 厚さ瓦当 1.7・平 2	良好	灰黒色	唐草文 江戸式・山崎 V
30	T10 SK004	軒丸瓦	軒平部厚さ瓦当 1.5	良好	灰黒色	唐草文 桶状の中心飾り 大板式
31	T 3 E SK001	軒丸瓦	軒平部厚さ瓦当 1.6	良好	灰黒色	唐草文 桶状の中心飾り 大板式
32	T 27	冠瓦	現存長 7, 現存幅 8.3, 厚さ 1.7 ~ 1.9	良好	灰黒色	縁の割線部にクシ目状の接合痕
33	T 34	瓦瓦	現存長 20.2, 幅 14, 厚さ 1.8 ~ 2.1	良好	灰黒色	裏面に灰い布目紋, 縁状江瓦
34	T 15	瓦瓦	現存長 16.1, 現存幅 10.2, 厚さ 1.4 ~ 1.9	良好	灰黒色	裏面に縁状江瓦
35	T 27	瓦瓦	現存長 12.5, 現存幅 10.6, 厚さ 2 ~ 2.2	良好	灰黒色	裏面に縁状江瓦
36	T 10 SK004	瓦瓦	現存長 9.8, 現存幅 6, 厚さ 1.7 ~ 2.1	良好	灰・灰黒色	裏面に灰い布目紋
37	T 27 W SK001	瓦瓦	現存長 8.7, 現存幅 14, 厚さ 1.7 ~ 2.1	良好	黒色	縁に切込み, 釘穴 1ヶ所
38	T 3 E SK001	瓦瓦	現存長 11.2, 現存幅 16.5, 厚さ 1.7 ~ 1.9	良好	灰黒色	釘穴 1ヶ所
39	T 10 SK004	瓦瓦	現存長 12.8, 現存幅 16.2, 厚さ 1.8 ~ 1.9	良好	灰黒色	
40	T 15	瓦瓦	現存長 25, 現存幅 15.5, 厚さ 1.7 ~ 1.9	良好	灰・灰黒色	平部に切込み痕
41	T 20 SK001	瓦瓦	現存長 20.5, 現存幅 18.7, 厚さ 1.6 ~ 1.8	良好	灰・灰黒色	
鉄製品						
No.	出土地	種類	遺存率	計測値 (cm)・特徴		
42	T 3 E SK001	不明品	ほぼ完整	長さ 21.1, 幅 1.3 ~ 1.7, 厚さ 0.55 ~ 0.85, 重量 60.4 g, 厚さは先端部が薄い		
43	T 3 E SK001	圓巻釘	圓巻一部破損	現存長 5.4, 幅 0.3 ~ 0.75, 重量 3.5 g		
44	T 20 SK001	金具	ほぼ完整	長さ 4.7, 頭幅 0.5 ~ 0.85・中央幅 0.4 ~ 0.5, 重量 4.1 g, 両側に球体の頭, く字状に曲がる		
石製品						
No.	出土地	種類	遺存率	計測値 (cm)・特徴		
45	T 19	砥石	—	現存長 6.0, 幅 4.2, 厚さ 1.5, 重量 58.9 g, 灰白色, 表・裏の両面を使用		
木製品						
No.	出土地	種類	部位	計測値 (cm)・特徴		
46	T 31	桶	底 右側板	長さ 39.4, 幅 14.8, 厚さ 2.3 ~ 2.5, 復元径 41.2, 底裏に判読不明な墨, 竹釘穴 2ヶ所		

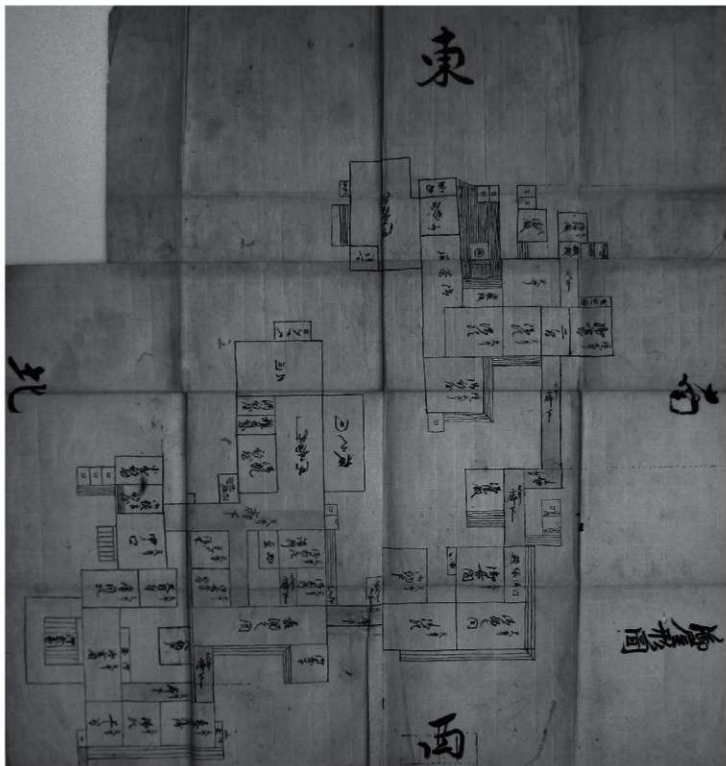
表 3 遺物観察表

### 第3章 まとめ

黒田氏時代の近世久留里城は、山上部に本丸・二の丸、麓には三の丸のほか、その東側に三の丸後曲輪・西側に外曲輪を配置した江戸時代中期に再築された城郭である。山上部は明治2年(1869)の版籍奉還により国有林となり現在に至るが、麓については、民有地として、明治初年に旧藩士たちに土地が割り振られたことが、第4図の改組図によって判明する。その後、土地の所有者に変化は生ずるものの、農地景観として三の丸跡とその周辺の遺構が残されてきた。今回、倉庫建設に伴い、初めて三の丸跡の調査を行うこととなった。下記に調査結果をまとめた。

- 1 中世の遺物が全く出土していないことから、里見氏時代は生活の空間ではなかったことが窺える。
- 2 調査前、地籍図から読み取れる土塁の痕跡を探すため、トレンチを設定したが、水田耕作が行われた東側部分については、見つからなかった。しかし、西側の内堀跡寄りのT 29で畦畔の断面を観察した結果、土塁の盛土痕跡が認められたことから、内堀跡側の畦畔部に沿って残っている可能性がある。
- 3 T 29では土塁の盛土と地山の間に、土塁構築以前の土層を確認した。黒田氏の再築以前は、この一帯は田畑と化している<sup>(1)</sup>ので、この時の耕作土と見られる。
- 4 内堀跡の調査は、T 37で堀底と思われる部分を検出した。土塁の底辺からの深さは3.90 mで、『久留里城絵図(写)』記載の深さ「式間」(3.60 m)とほぼ一致する。
- 5 北東隅のT 3・T 3 Eで検出した地業遺構は、布掘りした後、砂利を充填していた。南北2間×東西4間ほどの土蔵風の建物が想定される。
- 6 南側のT 26・T 27・T 27 E・T 27 Wで検出した東西方向の石組溝の1号溝跡は、西側で南側方向にほぼ直角に曲がるのが判明した。この溝は、三の丸南側にあった「御屋形」(第17図)の北側と西側を区画していたと考えられ、黒田家家紋入りの鬼瓦が溝から出土していることから傍証できよう。

註(1)『久留里古城地図』(國學院大學図書館蔵 八代家田蔵本)ほか



第 17 図 三の丸御屋形図

※御屋形は三の丸の南半部にあり、建物は大きく3つに分かれていた。北西部に家老をはじめとする重臣たちの職場、南東側が城主が生活する場所で湯殿もみられる。中間には客間があり、それぞれの建物は廊下でつながっていた。物置などを含めると全体で35部屋あった。



1. 調査前の久留里城三の丸跡（南→） ※左側は内堀跡



2. 久留里城二の丸跡より三の丸跡を望む（東→） ※右側のトレンチ掘削部分が調査対象地、左側が「御屋形」跡



1. T3 1号地業遺構 SB001 (北→)



2. T3 1号地業遺構 SB001 (南西→)



3. T3 1号地業遺構 SB001断面 (南→)



4. T3 E 1号地業遺構 SB001 (北東→)



5. T15 3号土坑 SK003 (南→)



1. T27 1号溝跡 SD001 (東→) ※写真奥で左方向(南側)に屈曲する



2. T27 1号溝跡 SD001 (西→)



3. T27 1号溝跡 SD001 (南東→)



4. T26 1号木杭遺構 SA001・1号溝跡 SD001 (東→)



5. T33 3号木杭遺構 SA003 (北→)



図版4



1. T29 土壘跡 (南→)



2. T37 内堀跡 (東→)



3. T21 東側断面 (西→)



4. T20 1号土坑 SK001 (東→)



5. T20 2号土坑 SK002 (東→)



6. T10 4号土坑 SK004 (南西→)



7. 対象地南東側作業風景 (北→)



8. T15 作業風景 (西→)



1. 陶磁器 (第14图)



2. 瓦 (第15图)



1. 瓦 (第15图)



2. 瓦 (第16图)



1. 瓦 (第16図)



2. 鉄製品・石製品・木製品 (第16図)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	きみつし くるりじょうあと3							
書名	—君津市— 久留里城跡3							
副書名	倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	矢野淳一 曾我真実子							
編集機関	君津市教育委員会							
所在地	〒299-1192 千葉県君津市久保2丁目13番1号							
発行年月日	西暦2024年(令和6年)3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		世界測地 系北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
久留里城跡3	君津市久留里字交 代416番4の一部 ほか	12225	KT039	35° 17' 15"	140° 05' 00"	2023年11月13日～ 2023年12月19日	505.9 /4,548.24㎡	倉庫建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久留里城跡3	中近世城 館跡	近世  近代以降	地業遺構1基・土坑1基・溝跡1条・ 木杭遺構3箇所・土塀跡1条・内堀跡 1条  土坑3基	陶磁器・瓦・鉄製品・ 石製品・木製品	三の丸跡北半部の遺構確認調査を 行い、北東部で埋物の地業遺構、 南側で三の丸内を区画する石組遺 構を検出し、給園では加れない三の 丸の様子が判明した。

---

令和6年3月22日 印刷  
令和6年3月29日 発行

— 君津市 —  
久留里城跡 3

倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 ISWIN JAPAN 株式会社  
君津市教育委員会  
君津市久保2丁目13番1号  
印刷 有限会社アドメイクス  
千葉県木更津市清見台東2-19-16

---

